

東京大学

理学部広報

第1巻 第14号 昭和44年12月10日

内 容

進学生の諸君を迎えて(理学部長)	2
理学部への進学生学科別内訳	3
大学改革問題についての全学学生委員会委員長からの呼びかけ	3
理学部会合日誌, 教授会メモ, 外国人研究員	4
入試制度に関する教官懇談会メモ	5
臨時カリキュラム委員会の設置	6
第32回国立10大学理学部長会議	6
長谷部言人元教授逝去	7
お知らせ(教務関係, 職員検診)	7
寄稿: 1969年をふりかえって(小堀巖)	7

進学生の諸君を迎えて

理学部長 久保亮五

昨年から、今年にかけての激動は、この理学部にも極めて大きな影響を与えました。その深い傷は未だに癒えてはいませんが、その傷から新しい生命の活力が湧きでることを私たちは切に望んでいます。その生命は学問の教育と研究という大学本来の活動によってのみ鼓動するものです。およそ8ヶ月もおくれましたが、今ここに学問への熱意に燃える諸君を新たに迎えることは私たち理学部教官のひとしく喜びとするところです。

理学部は基礎自然科学を主体としています。数学は自然科学ではありませんが、最も基礎的な科学として理学部の重要な構成要素を成しています。理学部の諸科学は、数学、物理、化学、生物学、地学に大別され、それぞれはまた学科、課程に区別され、それらに対応して12の教室があります。誰でも知っているように、今日の科学はきわめて広く、かつ深く、人間社会の活動に浸透し、その諸分野は相互に密に関連し、またその応用と基礎は分ちがたくからみ合い、基礎科学は応用の新生面への活力を与え、また応用はひるがえって基礎の進展の動力となっています。これはなにも今日に限ったことではなく、歴史をふり返れば科学と技術の発展はつねにそうであったことを見出します。にも拘わらずことさら今日、基礎と応用、科学と技術の相関に思いを致さねばならないのは、科学と技術の急速な発展が今日の社会、明日の社会の極めて重要な問題であるからです。その相互の関連を断つことは不可能であるばかりか、それはかえって大きい危険さえもたらします。

大学には応用諸科学、諸技術を中心とする諸学部があります。基礎と応用が分ち難く連なっている現在、理学部とそれらの諸学部とは、研究、教育の実際において必ずしも明確な区別はないであります。工学部でも、医学部でも、農学部、薬学部においても、理学部におけると同様な研究、教育が行なわれ、理学部にまげずおとらず基礎的な、実用と直接縁のないような研究さえも存在しています。大学の学部の構成が今のままでよいか、あるいは物理、化学、生物などそれぞれが基礎から応用までを包括した新しい学部編成されるのがよいか、なども大学改革の問題として熟慮に値することでしょう。しかし、もちろん現在のような編成、あるいはそれに近い編成にもそれなりの意味があります。実際、理学部としてみれば、その各学科、各課程、あるいは教室は、教育の面でも研究の面でも相互に網の目のようにつながり、

またその各々は応用的な諸学部の諸学科に連なり、理学部は大学のすべての学部、研究所につながっています。

このような連関が単なる観念でなく、本当に生きているかどうかは大きな問題です。総合大学、universityと呼びながら総合的ではない、という批判は私たち自身がつねに味わっているところです。理学部の中にしても、諸学科のあいだの連関、協力が貧弱であることは痛感していることです。そういう連関を生かすことは、大学全体でも、また学部の中でも、単に形の上の組織でできるものではありませんが、そのあり方の再認識は大学改革の最も基本的問題の一つであります。しかし、理学部が将来とも、いまの形の理学部であるべきか否かは別として、専門分野の違いに拘らず、基礎科学に対する態度における共通性は、昔から理学部を理学部としてまとめる最も大きい力でありました。理学部にあるわれわれがこのように共感するところのものは、将来もやはり科学を支える最も重要な要素の一つであり、人間活動に欠くべからざる側面の一つでありましょう。

諸君が何を求めて理学部にこられたのか、それに対して理学部が提供し得るものは何か。教育の理想はその二つが一致することでしょう。しかし、現実はずしもそうではありません。したがって不満や落胆も起こるでありましょう。どのような問題が起こるか、必ずしも予見することはできませんが、教官と学生諸君の相互の信頼と協力があれば、満足とまでゆかなくてもその一つ一つを解きほぐす途は何かあることと思います。元来、教育は一方通行ではなく、教えるもの、教えられるもの間の往復のプロセスです。

理学部における教育の条件は決して理想的ではありません。設備にしても、人にしても、もっともっと充実し改善すべきものです。戦後二十数年、私たちはそのための努力を傾けてきましたが、未だその及ばないところを慨いています。われわれの現状が日本の中ではまだしもこの理学部をも含めて、日本の大学が世界に伍して大学らしい大学として人間社会の将来にその意義をもつようになるためには、日本の国全体として根本的な方策を打立てる必要があります。しかし、現在この条件のもとにおいても、理学部の教官は諸君の教育のためにその最善をつくされることと思います。同時に、諸君は諸君の最善をつくされることを要望します。

諸君はこの理学部で、それぞれに選ばれた分野の基礎を学ばれることになります。科学を学ぶには大別して二つの段階があります。第一は知ること knowing、第二はわかること understanding です。単なる知識という

ように、知ることを軽んずることもしばしばですが、知ると知らぬは大ちがいで、知ることは大切です。しかし、ニュートンの運動法則をいうことができる、すなわちそれを知っているだけでは、これがわかったことにはならないでしょう。わかることにも、いろんな段階があり、ニュートンの運動法則にしても、本当にわかっているのか、ときかれれば私自身も本当にそうだ、ということをちゅうちょします。まあ、そこまではいわないにしても、ここで皆さんが学ばれることは、基礎の大事なものの **understanding** を得ることでしょう。わかる、というプロセスはどういうことか。それは基本的に、それについて問を発し、その間に答えるということです。そのためには考え、模索をし、実験をしなければなりません。試み、その結果を検べ、誤りを発見し、試みを繰り返す。このプロセスを繰り返して私たちは理解に近づきます。そうして理解したものはこれを使うことができます。また使うことによって理解が深められます。

このような過程は研究というものの過程です。自ら発する問が独創的なものであり、その答が前人未踏の地を拓くものであれば、それは真に研究という名に値します。先人の残した科学の体系を学ぶ課程で、諸君が自らのうちに醸酵させなければならぬものは、そのような新しい研究の境地ではありませんが、過程そのものは研究活動と同種のものであります。理学部における教育は、本質的に、諸君自らのそのような活動を助けるためのものでなければなりません。諸君が将来、科学のフロンティアを推し進める研究者となるにしても、科学を応用する分野の開拓者、科学の成果を人に教える教育者になるにしても、あるいはもっと広い社会活動をするにしても、科学のある基礎分野をそのようにして把握することがそれらの活動の根本となることを期待します。理学部の教育の役割はそのようなものであると私は考えています。それを果すこともなかなか容易なことではありませんが、教師と学生の辛抱づよい努力によって、それに近づき得るものと信じています。

最後に二三、別なことを申しておきたいと思います。理学部の授業科目は今度からかなり変わりました。その特徴は選択の可能性が一般にふえたこと、また異なる学科、課程で行なわれる科目をとることの便宜が考慮されていることです。しかし、数多くの科目をいろんな可能性に合うように配置することは極めて困難ですから、実際的な問題はいろいろ起こることと思います。そういう点については各人が教官とよく話して下さい。第二に、8ヶ月もおくれた進学のととの授業計画の問題ですが、このおくれを取りもどすために教官としても大きい

努力を覚悟しています。いまの予定では、昭和46年の6月末に卒業できるよう、第5ないし第8学期の授業を組んでゆきます。第三に、学部内の諸施設の利用と規律の問題です。学部共通細則のある部分は死文化し、新しい規則の制定を必要としています。それは大学改革問題の一部ですが、未だその実現の見通しははっきりせず、また暫定規則もできていません。しかし、本来、大学が学問の教育と研究のために存する以上、それを可能とする条件を整えることは、大学にあるすべてのものの義務であります。その意味で諸君の理解と協力を要望します。

1969. 12. 1

理学部への進学生学科別内訳

12月1日には教養学部第4学期を終えて各専門学部に進学する学生を本郷キャンパスに迎えた。その大部分は昭和42年度教養学部入学者であり、昨年来の紛争のために8カ月遅れの進学となった。この日午前中理理学部としての進学ガイダンスが、また午後には各学科別のガイダンスが行なわれた。本年度理学部進学生数は245名で、学科別進学生数は下記の通りになっている。

学科・課程名	進学生数	出身科類
数学科	48名	理一43名, 理二5名
物理学科	71名	理一54名, 理二17名
天文学科	5名	理一5名
地球物理学科	16名	理一8名, 理二8名
化学科	45名	理一25名, 理二20名
生物化学科	20名	理一5名, 理二15名
生物学科動物学課程	8名	理一1名, 理二7名
生物学科植物学課程	7名	理二7名
生物学科人類学課程	4名	理二4名
地学科地質学・鉱物学課程	13名	理一2名, 理二11名
地学科地理学課程	8名	理一2名, 理二6名

なおこの他学士入学者1名がある。

大学改革問題について 全学学生委員会委員長からの 呼びかけ

昭和44年11月20日付にて、全学学生委員長柳井久義工学部教授から次のような呼びかけが各学部を通じて行なわれた。

学部学生諸君へ

去る10月14日、加藤総長は、「大学改革についての提案」を発表し、教官側の全学改革委員会に対応して学生側の全学改革委員会を作るよう、学生諸君に呼びかけました。その際、学部学生との接触の窓口には、学生委員会が当ることになりましたが、広く学生諸君の意見・希望・質問に応えるため、とりあえず、学生委員会としては、委員長・副委員長が下記により定期的に学生諸君と接触する窓口を開くことにしました。

ついては、全学の改革委員会の問題について質問や意見のある諸君は、積極的に申し出られることを歓迎します。

	場所	構内電話	時間
学生委員長 柳井久義	工学部3号館(電気 電子工学科)自室	6318	毎週(月~土) 12.00~13.00
同副委員長 金子宏	法学部(1号館) 第2演習室	7677	毎週(月~土) 12.00~13.00

なお、この窓口の利用を希望される場合は、混雑を避けるため、あらかじめ当日の11時までに構内電話でその旨を連絡して下さい。

昭和44年11月20日

学生委員長 柳井久義

柳井委員長は理学部全学生に対しても、大学改革問題に関心を持っていろいろと意見を出していただきたいと願っておられます。全学の学生委員会には理学部からは小柴助教授(物理)が委員になっておりますので、学部学生諸君は柳井教授(工学部電子工学)あるいは小柴助教授(理1号館362号室)にどうぞ積極的に意見を申して下さい。

理学部会合日誌

- 11月1日(土)
- 2日(日)
- 3日(月)
- 4日(火)
- 5日(水) 全国理学部長会議・事務長会議
- 6日(木) 全国理学部事務長会議
- 7日(金) 学生大会(16~23時半, 理2号館大講堂), 学部長 理職との会見(10時半~12時15分)
- 8日(土) 教室主任会議(10時~12時半)
- 9日(日)

- 10日(月) 理学系大学院研究科委員会(14~17時)
- 11日(火)
- 12日(水) 人事委員会懇談会(13時半~15時半), 総合計画委員会(15時半~18時)
- 13日(木) 理職早朝スト
- 14日(金)
- 15日(土) 18時以降本郷構内閉鎖
- 16日(日) 本郷構内閉鎖
- 17日(月)
- 18日(火) 会計委員会(13時半~15時)
- 19日(水) 学部長 理職との会見(11~12時), 定例教授会(13~18時, 於4号館会議室)
- 20日(木)
- 21日(金)
- 22日(土)
- 23日(日)
- 24日(月)
- 25日(火) 学生大会(18~22時, 於理2号館講堂)
- 26日(水) 教室主任会議(15~18時)
- 27日(木)
- 28日(金) 入試に関する教官懇談会(15時半~18時, 於化学新館会議室)
- 29日(土)
- 30日(日)
- 12月1日(月) 新3年生進学ガイダンス(午前中)と各学科でのガイダンス(午後), 教養学部カリキュラム検討小委員会(15~17時)
- 2日(火) 会計委員会(16~17時半)
- 3日(水)
- 4日(木) 教養学部カリキュラム検討小委員会(15~17時)
- 5日(金)

教授会メモ

11月19日(水) 定例教授会
(13~18時, 於物理新館会議室)

議事に先立ち、去る10月27日に逝去された正野教授の冥福を祈って黙禱を捧げた。

1. 前回議事承認
2. 人事異動報告
3. 学生転学部に関する件
4. 研究生に関する件
5. 諸報告(幹事会交代, 理学系大学院入試, 国立十大学理学部長会議, 学内状況など)

幹事会交代、理学系大学院入試については理学部広報先号にその内容は掲載されている。国立十大理学部長会議については広報本号に掲載してある。

6. 幹事会報告

新幹事長高橋教授(化学)の挨拶があり、早速入試問題についての意見をまとめることに着手しているの、アンケートに協力していただきたいとの要望があった。

7. 会計委員会報告

斎藤会計委員長から水道料算定について昭和44年度より新方式を採用するに当り、支出見込として昭和43年度を基準に考えていたところ予想外の出費になることが明らかになり、昭和41、42年度を基準として再計算していると報告があった(昭和43年度水道使用状況は紛争の影響が大きくあらわれていたことを意味する)。また化学教室からこの際部長保留金で建物入口などを整備したい希望が出されているので、各号館にもそのような必要性について問合わせることにすると報告があった。

8. 総合計画委員会報告

赤松委員長から、現在理学部自体の問題としても関心が持たれていることとして

- 1) 情報科学研究に関する理学部の立場
- 2) 建物の狭隘
- 3) 原子力関係講座の将来

について審議の経過と現状の報告があった。

9. 教養過程に関する問題

明年以降の入試について議論しておく必要があることについて入試制度委員田丸教授の説明があった。また昭和45年度入学者に対する教養課程教育の改善に関して臨時カリキュラム検討委員会が発足することになり理学部からは高宮教授(生化)が委員として参加することになった旨学部長から報告があった。(別記参照)

10. 今後の授業計画と進学に関する問題

新しく3年生に進学する学生を12月1日に迎えることになっていること、これらの学生に対しては3年前期は明年4月中旬まで、3年後期を9月下旬に終え、4年前期は明後年2月中旬まで、4年後期を6月中旬に終えて6月末に卒業予定となる、との予定が考えられていると学部長の報告があった。また、昭和43年度入学者の第4学期は昭和45年5月1日からと予定されているが、留年者をふくめて学生数が学部定員を約3割超えるため、特に理科系諸学部では進学について困難な問題がある。理科系学部は次の年度の進学に対応する進学クラスを設ける必要があると考えられるが、目下各学部各学科の間の調整をはかっている段階である。

11. 改革問題について

加藤総長から「大学改革についての提案」が出されて以後、さして活発な進展がみられていない現在、改革委員会発足に向けてどのような方法で進展が得られるかについて議論した。

12. その他

新外国人客員研究員の報告があった(下記)。末元教授より昭和45年度教職課程についての説明があった。河田教授より、理学部紀要の市販をはかるための具体的方策を考えている旨の報告があった。

なお当日の教授会席上で永田教授および久城講師から月岩石試料についての説明があった。また教授会終了後、昨年度研究費で理3号館屋上に設置した24吋反射望遠鏡の見学希望者を招待したいとの末元教授からの申出があった。

外国人客員研究員

下記の客員教授が11月教授会で承認された。

米国籍 Indiana 大学教授 Russell A. Bonham

世話担当: 化学教室 朽津教授,

在留期間: 44. 9. 1~45. 5. 31

入試制度に関する教官懇談会メモ

11月28日(金)午後3時半~6時05分化学新館会議室において、学部長、幹事会と有志教授会メンバー計15名が集って懇談会をひらいた。東京大学での将来の大学改革に際して入学試験制度も一つの重要な問題であり、さしあたり昭和45年度入試要項はほぼ従前通りと発表されているが、昭和46年度以降の入試については大幅な改革を実施しうる可能性があるため、この日の懇談会では昭和46年度以降の入試を扱うのが主眼ではあるが、入試問題全般についても論じた。入試問題は全学的な問題であるので、全学的にアンケートがすでに出されており、また理学部でも独自のアンケートが出されてその結果が集計されている。議論された要点は

大学はいかなる人を入学させるべきであるか?

理学部は?

教養学部における教育の仕方、専門教育との関係など大学としてまた理学部としての教育の根本的な問題が根底にあるので、教育と入試とを切り離して議論することは難しい。いろいろな議論が出たが、理学部教官の大体の意向として、大学入学時に将来理学部進学を志す人達を理科四類として入学させるようにするのが教育の目的から適当であり、このことを高校にも伝えておくの

がよいと考えている。また理学部で独自に試験を行なう可能性、入試に際して面接・内申書参照の方式、全国統一テストの問題も論じられた。この懇談会で出された議論をもとにして理学部としての意見を近々まとめてゆくことになる。

臨時カリキュラム委員会の設置

昭和 45 年度入学者の教養課程および専門課程のカリキュラムを中心として、本学のカリキュラムの検討を行ない、その具体的方策につき審議するために、臨時カリキュラム委員会を設置することが、教養学部問題委員会の議を経て、11 月 18 日の評議会で了承され、11 月 21 日にその第 1 回会合が開かれた。このカリキュラム問題は、大学改革の一環でもあるが、さしあたり急を要するので、臨時の委員会を設けて検討することとなったものである。この委員会の性格は総長の諮問機関であって、その報告内容、カリキュラムなどの最終的審議決定は評議会で行なわれることになる。

この委員会の委員長は城塚教養学部教授で、委員構成は教養学部から 6 名、その他の各学部から各 1 名、研究所から 2 名（人文社会科学系・自然科学系各 1 名）となっている。理学部の委員は高宮教授（生化）です。

11 月 21 日の第 1 回会合席上では、総長より諮問事項について説明があった後、昭和 45 年 1 月末までに第 1 次報告を出すように要望があった。当日は今後の作業の進め方や各学部のカリキュラム改革の進行状況などについて相互に意見を交換した。今後は毎週 1 回程度の割合で委員会が開かれる予定である。（以上学内広報 No. 50 および No. 51 より抜粋）

理学部では高宮教授が世話役になられて、次のように事項について各学科の意見や要望を集約し、理学部の意見としてまとめつつある。

- 1) ふりわけの時期についての要望、ふりわけの方法、ふりわけ区分の大小など。
- 2) 「くさび型」教育の可否、可ならばその実施方法。
- 3) 理学部志望者あるいはふりわけ後の理学部学生に対しては、どのような一般教養課程目があるか。現行の一般教養課程目の効果、過不足について。
- 4) 「概論」講義は有用か無用か。

これらは考慮すべき問題の一部にすぎませんが、カリキュラム改革の問題は大学での最も大切なことの一つですので、各学科における教育履修の実情に即して十分に検討いただき、至急みなさんの御意見を積極的に出していただくことを高宮教授は期待しておられます。

第 32 回国立 10 大学理学部長会議

昭和 44 年 11 月 5 日、東京工業大学理学部の主催で、国立 10 大学理学部長会議が行なわれた。今回は春の会議のあとをうけ、自由討論を主とし、「大学における理学の研究および教育体制のあるべき姿と将来に対する構想について」を主題とし、

I. 助手層のあり方

1. 助手の地位、職責などに関する一般的討議
2. 具体的諸問題、a. 大学院担当手当、b. 特別昇給、c. 教授会への参加、d. その他

II. 大学院層（特に博士課程）のあり方

1. 大学院生の位置づけなどに関する一般的討議
2. 具体的諸問題、a. 奨学金、b. インストラクター制度、c. その他

を一応のテーマとして、各大学の実情、将来の考えなど活潑な意見の交換があった。特に博士課程については、その身分に関連し、これを新しく研究員なるもので代える考えについて種々の意見がでた。

午後、文部省大学学術局大学課長吉田寿雄氏、同補佐白井実氏が出席し、各理学部長から、上記の問題について一般的なこと、具体的なこと、また将来の見通し等について質問があり、これに対する答もあつたが、文部省として現時点では未だはっきりした方策をもち得ず、中教審の答申待ちの様子に見受けられた。一方、大学側からは、今日の事態は日本の将来に対して非常に大きな影響を残し、相当長期にわたる沈滞が憂えられることが指摘された。

（理学部長記）

長谷部言人元教授逝去

本学理学部教授であられた長谷部言人博士は、12 月 3 日御自宅で 87 才の高令でなくなられました。葬儀は 12 月 6 日（土）13~14 時、告別式 14~15 時、千日谷会堂において人類学教室・日本人類学会合同葬で行なわれました。故長谷部教授は東京大学理学部に人類学教室が創設されたときに東北大学から赴任され、初代主任教授として本学停年退官までの 5 年間に人類学教室における研究教育体制の確立、後進の指導につくされました。

長谷部先生の御略歴を記しますと、

明治 15 年 (1882) 6 月 10 日 東京生れ

明治 39 年 (1906) 東京帝大医科大学卒業

明治 41 年 京都帝大助教授（医学部解剖学教室）

大正 2 年 新潟医専教授

大正 5 年 東北帝大助教授（医学部解剖学教室）

大正 9 年 東北帝大医学部教授に昇任, 昭和 8~
10 年医学部長

昭和 13 年 東京帝大教授

昭和 14 年 理学部人類学科創設, 初代主任教授

昭和 18 年 停年御退官

この間大正 2 年には「日本人の脊柱」の研究で医学博士号を, また昭和 21 年には「石器時代の日本人」の研究で理学博士号を受けられた。長谷部先生の御研究は, はじめは日本人の人類学から発展し, 自然人類学に関する研究はもとより, 先史学土俗学など広範囲にわたり, その帰結の一つとして唱えられた日本人の出自に関する独特の学説は, その後今日に至るまで学界に大きな影響を及ぼしている。卓抜な着想によって人類の進化に関する既成概念を打破することを提唱され, 人類学の進むべき新しい方向として働働学的重要性を強調された。

本学御退官後は, 日本学術会議会員, 文化財専門審議委員などをつとめられ, 昭和 28 年には日本学士院会員に推戴され, また昭和 26~43 年の間日本人類学会会長としてひろく人類学の発展につくされた。

長谷部先生は, いまから 26 年も前に東京大学をお去りになっておられますが, 「人類学の長谷部先生」というお名前は今でも有名であり, 先生の訃報に接し, まことに哀惜の念にたえません。先生が長年奉職されました東北大学からは名誉教授の称号をお受けになっておられましたが, 東京大学には僅か 5 年しか在籍しておられませんでした関係上, 内規によって本学名誉教授の称号をさしあげることはできませんでした。本学人類学教室では教室創設者としての故長谷部先生に感謝の意を表して人類学会との合同葬を営み, 御冥福を祈りました。

(記事内容提供: 渡辺教授)

お知らせ

下記の教務関係通達が掲示されていますので詳細は掲示をごらん下さい。

昭和 44 年度教育職員免許状取得希望者は, 理学部事務部受付にて授与願書を請求の上, 願書を必要書類とともに昭和 45 年 2 月 5 日までに理学部教務掛に提出して下さい。

昭和 44 年 12 月進学者 (3 年) で昭和 44 年度後期分授業料の半額免除を希望する学生は 12 月 15 日までに免除願を理学部事務部に提出して下さい。

昭和 45 年度スイス留学生募集: 年令 35 才未満の大学卒業者。締切: 昭和 45 年 1 月 20 日

40 才以上の職員に対する胃の集団検診

成人病管理対策の一つとして行なわれるもので, 受診希望者に対し, 費用一部個人負担で胃部 X 線間接撮影 (バリウム透視) を, 昭和 45 年 2 月~3 月に実施する計画です。希望者は申込票に必要事項を記入し, 自己負担額を添えて 12 月 12 日 (金) までに各教室事務あてに申込んで下さい。

寄稿

1969 年をふりかえって

小堀 巖 (地理学教室)

“歲月人を待たず” という中国の諺の通り, 今年も旬日を経ずして暮れようとしている。私は, この一年間, いろいろな形で, 大学の変動に直接間接に参加する機会が多かったので, 来し方をふり返って, 感慨新たなものがある。

“東大闘争とは一体何であったのか?” という問いかけが, この頃あちらこちらでやかれる。一年前のちょうど今頃は, 私は私なりに学生諸君のいわんとするところを, 討論や諸種の集会への参加, さらに立看やビラなどにもできるかぎり気をつけて理解することに必死になって努力してみた。しかし, 残念なことには, 難解な独特の学生用語が次第に理解できるようになった頃には, 事態は急速にすすみ, 1 月 10 日の全学集会から 1 月 18 日, 19 日に及んでしまった。それ以来, 十数カ月, 確認書あるいは 1 月 18 日, 19 日の出来事をめぐり, さらにいわゆる大学臨時措置法の施行をめぐって, いくつもの難問が残存し, 論議が重ねられた。そのどれを一つとりだしてみても, 一朝一夕に結論の出る性格のものではなかった。

一方, 本年初頭に, 将来の大学のあり方を考える大学改革のための準備調査会が発足し, 激動する事態のなかで, 会合を重ね, 最近その報告書が刊行されたことは周知の事実であろう。

このようなきわめてあわただしい推移の中から, 10 月中旬には“大学改革についての提案”がなされた。これは, 学生諸君の立場からいうと, 一方的な準備の進め方が問題であり, その間における各階層との協議がなかったことを追求するという姿勢から, そもそもナンセンスとして相手にしない姿勢にいたるまで, いわゆる無関心

層をもふくめて、提案に対する学生諸君の反応は、きわめて変化にとみ、率直にいった全般的にはあたたかいものではなかったように思われる。これは、学生諸君ばかりでなく、いわゆる教官層にも一見正常化の空気がみなぎり、いつのまにか、紛争前と変わらない状況に沈潜している姿勢がなしとはいえないであろう。

私は、東大闘争は、歴史的な意味があったと考える。戦後の経済成長の陰にかくれて、当事者は勿論、時の政府や政党（野党をも含めて）社会一般ともども、高等教育の問題がどのように重大であるかを放置していたことに、大人は責任を感じねばなるまい。と同時に、問題を提起した学生諸君が、大学の当面する問題あるいはその矛盾の本質をつくことからやや逸脱して、一般的な政治問題との結びつきにともすれば走りがちであったことは、真摯な問題提起の本質を、人々に理解させがたくしたといわざるを得まい。

しからば、私達の大学は、改革に値しないものであろうか？ おそらく大部分の学生諸君の答は、否！ であろう。現在の大学の教育研究体制、管理運営の体制、どれ一つをとってみても、現状では、不十分なものが多いことは、大学に職を奉じ、学を求めるすべての人々に共通の感慨であろう。理学部あるいは理学系をとって考えてみても、各教室あるいは各課程毎に、さまざまな要求事項が出揃っており、それぞれの異質な背景がある。一方、いわゆる学生の処分、学部共通細則のような学生の身分や自治に関する問題は、単に理学部あるいは理学系の問題であるばかりでなく、全学的に議論されねばならぬ問題であろう。また、カリキュラムの問題、大学院の修士、博士課程の内包する種々の問題、研究費の問題、さらには講座制のあり方をめぐる教育研究体制の問題など理学部あるいは理学系にとって、それぞれ各々の特殊な事情はあるにせよ、かなり全学的に共通した問題があるように思われる。いわゆる指導教官制の問題一つをとってみても、つきつめれば現行の大学院制度の根幹にふれる重要課題をいくつか含んでおるし、大学院の年限のことなども、課程によって事情はことなりながら、やは

り理学系としての共通の問題もあり、また全学的に併存する事例も多い。さらにこれらの改革をつきすすめるには、将来の学部、研究所のあり方を根本的に考えなおすことも必要であり、理学部ないし理学系の枠のなかだけでは改革しきれず、全学的な改革委員会にはからねばならぬことも少なくあるまい。

このように考えてみると、理学部あるいは理学系の学生諸君が、自らの当面している問題をふまえ、全学的な視野で改革に参加することは、昨年来の問題提起の一環としてばかりでなく、本来的にきわめて意義のあることのように思われる。さらにまた、理学部では、昨年来の紛争よりはるかに先立つ昭和 36 年頃から、理学部の将来のあり方について真剣な討論が重ねられてきており、大学院を中心にした教育研究体制がかなり具体的にまとめられていた。このような成果を、今後の改革のなかでどう活かしてゆくかは、盾の反面である理学部あるいは理学系の学生諸君の旺盛な討論に値するであろう。

長い間の紛争のために、研究や実験がたてこみ、勉学に没頭している多くの学生諸君の日常生活を見るにつけ、事の両立の難しさは私にもよく理解できる。このことは、教官にとってもまさに同様であり、研究に没頭している人々を、未来へのたゆみない改革に引き出すことは、なかなかの難事であろう。しかし、自ら蒔いた種は、自ら刈りとらねばなるまい。

私達は、1970 年という年は、一度しか来ないことを考えねばならない。安保や沖縄の問題をめぐって、国際的にも国内的にも日本は試練に立たされる年である。この試練を、単なる現状の温存や微温的な改良に止まっていたならば、恐らくは、悔いを後世に残すことになる。ある意味では、この世界史的な変革の時代に、グローバルな観点から、自らの体験を固くふみしめて、大学の改革を含めて、人間や学問の問題を根底的に考えてみることは、幸いにも 70 年代に生を受けている私達にとっては、千載一遇の快挙ではないであろうか。諸賢の論議を待望する所以である。

●みなさんからの御投稿をお待ちしています。宛先は 地球物理研究施設 福島 直 (内線 7511)